

古ポルトガル語における否定表現¹⁾

黒 沢 直 俊

1. はじめに

ポルトガル語の否定文は *não*, *nunca* などの否定辞を動詞の前に置くことによって作られるが、次の例に見られるように、現代ポルトガル語の規範では *nenhum*, *ninguém*, *nada* のような否定の意味を含む不定語が動詞に先行すると動詞の否定辞の *não* は省略され、逆に、不定語が動詞の後に移動すると否定辞が動詞の前に現れるという現象がある。

- (1) *Ninguém* tinha ânimo para sair. 誰も外に出る勇気がなかった
- (2) *Nenhuma* mulher faria isto. こんなことをする女性はいない
- (3) *Não* lhes deu *nenhumas* garantias. いかなる保証も彼らに与えなかった

従って、現代語では否定の不定語の後に否定辞が現れることはない。

- (4) **Ninguém não* tinha ânimo para sair.

同一文中に否定語が2回以上現れるような現象は、文法書などでは「二重否定」*double negative* というような項目で扱われ、例えば「ラテン語では、通常、同一文中に存在する2つの否定は相殺し合い、肯定に等しい」(Ernout 1972, p.153)とされるが、古ラテン語や口語ラテン語においては、このような否定語の重複はむしろ否定の強調にあたるのが普通であるとの指摘もある。(ibid., p.154, Väänänen 1981, p.152)

- (5) *Aperte enim adulantem nemo non videt, nisi qui admodum est excors; callidus ille et occultus ne se insinuet, studiose cavendum est.* (Cic., Lae.99)

実際、完全な馬鹿者でもない限り、誰でもあからさまに媚びいる者を認めないわけではない。しかし、巧みな、意図を隠した、このような者が取り入らないように注意深く用心されるべきである

- (6) *sed mulier quae mulier milvinum genus. neminem nihil boni facere oportet; aeque est enim ac si in puteum conicias.* (Petr., 42, 7)

女という女はみんな鷹や鳶の一族だ。女にいい目をさせてやるなんて、まったくいらんことさ。じっさい井戸の中に水を注ぎこむも同然だ。(国原訳)

本稿では、(5)のような、文全体の意味が肯定になるような場合を「二重否定」と呼び、(3)や(6)のような、否定語が文中に複数回現れ、文全体の意味が否定になるような場合を「否定語の重複」と呼ぶことにする。また動詞に対する*não*のような否定の単語を特に「否定辞」と呼ぶことにする。

2. 古ポルトガル語における状態

古い時代のポルトガル語では、否定語が動詞に先行する場合でも否定辞の *não* は繰り返されるのが

普通であり、現代語のように省略されるのは17世紀以降であるとされている。(Posner 1996, p.149)
たとえば、次の(7)では従属文中の動詞の主語 *nenhũu* とともに動詞の否定辞の *nom* が用いられているが、文全体の意味は単なる否定である。

(7) E sia pensando tanto que *nenhũu* o *nom* podia acordar de seu pensar, em guisa que *nom* metia mentes em festa nem em corte. (Demanda do Santo Graal, IX)

そして、彼は考え込んでしまったので、誰も彼を考えごとから引き戻すことは出来なかった。なにしろ、彼は晩餐会にも宮廷にも注意をはらうことはなかったのだ(「聖杯の探索(ポルトガル語版)」9章)

このような用例に関する説明としては、例えば、文法書の記述では、Ali 1971 (1931¹) は「我々とは違い、古い時代の作家は、人によっては1500年代まで、俗語法に従い、二重否定や三重否定など(=否定語の重複)を無制限に意味を強めるために用いていた(p.199)」(カッコ内は筆者)と述べている。ただしMartins 1997, p.194はポルトガル語が否定語の重複を行わなくなったのは、19世紀の作家にも否定語の重複の例や *nenhum* が肯定の不定語として使われている例があることから比較的最近のことではないかとし、否定語の重複は、このような語がまだ完全に否定の意味に特殊化していなかったこととの関連性を指摘している。²⁾

Ferreira 1987はこの点について「代名詞、または形容詞 *nenhuu* とそのバリエーションのあとで、ほとんどシステムティックに否定を用いる用法が観察される... 副詞の *nõ* が用いられないのは、たった6例に過ぎない (ibid., p.411)」と述べている。その資料から、否定語が二重に使用されている例のひとつと、否定辞 *nõ* が現れていないという問題の6例を挙げる。

(8) *nenhuu* crastado *nõ* possa *nẽguu* receber por filho (IV, 1123)

去勢されたものは誰も誰をも息子として受け入れることは出来ない(ように)

(9) *nenguu* seja ousado d'ir contra el (I, 40) 誰も敢えてこれ(=法)に歯向かうことのないように

(10) *nenguu* seja ousado de quebrantar eygreja (*nenhũa*) (I, 341)

誰も敢えて教会を破壊することのないように

(11) *nenguu* os accusou (IV, 442) 誰も彼らを告発しなかった

(12) *nenhuu* ly diga mal (I, 154) 誰も彼に対し悪口を言わないように

(13) *nenhuu* seja ousado de coller (I, 308) 誰も敢えて徴収することのないように

(14) *nenhuu* seja ousado de penhorar a outro *nenhũa* cousa (III, 1367)

誰も敢えて他人の物を没収することのないように

(8)は中世語で普通に見られる否定語の重複の例である。(9)から(14)の文では否定語が動詞の前に来ているにもかかわらず、*seja*, *accusou*, *diga*などの動詞の前には否定辞が現れていない。これらの例で接続法の動詞の変化形を波線で示したが、動詞が直説法である(11)を除くと、すべて接続法と共起していることがわかる。この資料では *nenguu* と *nenhuu*, 及びその変化形(<NEC UNU)

を合わせた語形の生起数は280であり、上の6例は極めて少数の例であることがわかるが、否定語の重複が普通であるとされる中世語にも、(1)や(2)のような動詞に対する否定辞が省略されている例があることがわかる。³⁾

3. テキストにおける否定語の使用

そこで、中世ポルトガル語版の「聖杯の探索」について否定語と動詞に対する否定辞の位置関係や否定辞の省略について調べてみることにした。テキストは Joseph Maria Piel-Irene Freire Nunes によるエディション (Lisboa, Imprensa Nacional-Casa da Moeda, 1988) を基にリスボン大学の歴史言語学ゼミ *Linguística Histórica II* (Prof. Doutor Ivo Castro) で作成した電子テキストを用いた。このテキストを伝える写本は15世紀のもので、ウィーン国立図書館に所蔵されている (ms.2594) が、Castro 1983 によれば、このテキストがポルトガル語へ翻訳されたのは13世紀半ばである可能性があり、古ポルトガル語のうちでもかなり初期のものに属する。⁴⁾

現代語の *nenhum*, *-uns*, *-uma*, *-umas* 「否定の不定形容詞, 代名詞」や *ninguém* 「誰も～ない」にあたる *nenhũu*, *nenhũa*, *nengũu*, *nengũ*, *ninguem* と、*nada* 「何も～ない」(語形は現代語と同じ) が調べられた。これらの否定語と動詞との位置関係、すなわち④ 否定語が動詞に対して前置されているか、⑤ 否定語が動詞に対して後置されているか、という点を、それぞれ否定語を含む句が、① 動詞の主語、② 動詞の目的語、③ 動詞に対する副詞的要素であるかで分類し、⑦ 否定語の重複が起きているものと、④ 動詞に対する否定辞が現れていない例の生起数を調査した。もちろん、多くの場合、否定語とは別に動詞の否定辞 *nom* は繰り返される。これが中世語における通常の状態であるからである。しかし、以下の表に示されたように否定辞が用いられない例も少数存在した。ただし、ここでは、否定語が単独で用いられていたり、比較構文の中での使用 (*era melhor cavalleiro que nenhũu dos outros* 「彼は他の誰よりも優れた騎士であった」) など、この調査の目的に合わない例は、④その他として除いてある。

I は *nenhũu*, *nenhũa*, *nengũu*, *nengũ*, *ninguem* II は *nada* である。(動詞 *nascer* の過去分詞としての *nada* は除いてある。) 対象とされたテキストの総語数は約211529語であった。

	① 動詞の主語				② 動詞の目的語				③ 動詞にかかる副詞的要素				④その他
	④ 前置		⑤ 後置		④ 前置		⑤ 後置		④ 前置		⑤ 後置		
	⑦	⑧	⑦	⑧	⑦	⑧	⑦	⑧	⑦	⑧	⑦	⑧	
I	48	<u>7</u>	24	<u>3</u>	2	<u>1</u>	26	<u>1</u>	8	<u>3</u>	50	0	21
II	0	0	1	0	1	0	22	0	0	0	0	0	1

I では、㊶ 前置 : ㊷ 後置の総数は 69 : 104, ㊸ 否定語の重複が起きているもの : ㊹ 動詞に対する否定辞が現れないものの総数は 158 : 15 であった。否定辞がないもので、否定語が動詞の前に来ている場合が 11 例、否定語が動詞の後に来ているにもかかわらず否定辞が現れていないというものが 4 例である。II では前置の例は 1 例しかない。これは *nada* が無生の不定代名詞であるという単語の性格によるものであろう。この単語は中世語では次に述べる *rem* とともに比較的後になって否定の意味を獲得したされるが、テキストではすべて否定の意味で用いられていると考えられるものばかりであった。動詞の主語となっているとされる例が 1 例あるが、動詞は *mingoar* 「不足する」であり、行為者性の低いものである。ほかに目的語として分類したものの中には動詞が *valer* 「に値する」で、主語か目的語かの区別が文法的解釈によって実ははっきりしないもの (3 例) や、動詞が *ser* 「である」であるもの (3 例) が含まれている。*nada* が動詞に対して前置され否定語の重複が起きている例は次のものである。(「聖杯の探索」からの例文の引用では、行末のローマ数字はテキストの節番号、イタリックで問題となっている否定語や否定辞を示した)。

(15) ... mas certamente, pois que vos *nada nom* sabedes de sua linhagem,... (CCXXXIV)

確かにそうです、というのはあなたは彼の血統について何も知らないのですから

また、この例文の直前のテキストには次のような例がある。

(16) "Como", disse Persival, "*nom* sabedes *al* de sa fazenda nem onde ou de qual linagem?"(CCXXXIV)

どうして、あなたは彼の所業や出身、血統などについて何も知らないのですか? とペルシヴァルは言った

(16) の例文の *al* 「何かあること」を用いた「何らかのことも知らない」と (15) に見られるような *nada* による「何も知らない」の間には意味の違いがあるのかもしれないが、表現はきわめて近く、否定と肯定の意味の不定代名詞の使用が重なる部分と言えなくもない。ちなみに、Megale 1989 の現代語訳では、両者ともに *nada* で訳されている。⁵⁾

テキストには他に 161 例の *rem* (< REM) が現れ、そのうち 139 例は否定語として、また 22 例が肯定の意味で用いられている。

4. 具体例

i) 否定語の重複が起きている代表的な例

以下に例としてあげる (17) から (23) までの例文は中世のポルトガル語の例としていわば典型的とみなされているタイプに属する。(例文では、今まで用いた注記法の他に波線で接続法の動詞の語形を示し、関係する否定要素には下線をひいている。)

① 否定語が動詞に対して前置されている場合

(17) Saiu-se o Santo Graal do paaço que *nenhũu nom* soube que fora delle nem por qual porta saira. (XXV)

聖杯は宮殿から出て行った。誰もそれが、その外へそしてどの扉から外へ出たのかわからなかった

(18) E Naciam o ermitam vos envia dizer por mim que *nenhũu* cavalleiro desta demanda *nom leve* consigo dona nem donzella, senam fará pecado mortal; (XXXIV)

そして、隠者のナスティアンが私を通してあなた方に伝えているのはこの探索のいかなる騎士も婦人や乙女を同伴しないようにということで、さもないと死に値する罪を犯すことになるだろう

(19) E respondeo entam: « Dom Persival, perguntade o que quiserdes, ca *nenhũa* cousa que eu saiba *nom* vos encubrirei, ainda por cuidar que me mal vinria ». (CCXXXVI)

そして、それから彼は答えた、「ドン・ペルシヴァル、あなたの望むことを何なりとお尋ねください、というのは、私に不幸が起こることを考えに入れても、私が知っている事は何もあなたに私は隠さないでしょう

(20) « Como quer avenha », disse Gallaaz, « em *nenhũa* guisa *nom* vos matarei ». (XLV)

「何が起ころうとも、私があなただを殺すことは決してないだろう」とガラースは言った。

②否定語が動詞に対して後置されている場合

(21) El rei lhe disse: « Dom Tristam, eu som mui ledo de vossa vinda, ca *nom* fallecia *nenhũu* dos companheiros da Tavola Redonda fora vos ». (XXIII)

王は彼に言った。「ドン・トリスタン、あなたが来て私はとてもうれしい、というのは円卓の仲間たちのうちあなた以外に欠けていた者はなかったからだ」

(22) Ja Deos *nom* me *ajude* se me eu i outorgo, ante irei pos elle, e quando *for* noite escura umde me anoutecer ai ficarei, e em tom *nom* me poerá *nenhũu* culpa. (CCXIV)

私が自分で決めるさ、神様なんかどうでもいい。とにかく、私は奴を追う、夜になって暗くなったら日が暮れたところに留まるさ、私を責めることはないだろう

(23) E quando el rei vio que todos aviam feita esta promessa, ouve gram pesar e grande amargura em seu coração, ca vio [qu]e os *nom* podia tornar em *nenhũa* guisa. (XXVIII)

そして王はみんながこの誓いを立てたのを見たとき、心の中で大きな悲しみと苦渋を感じた。というのも、彼らに再び会うことはないと思っただからである

ii) 動詞に対する否定辞が現れていない15例

調査では否定語と考えられる *nenhũu*, *nenhũa*, *nengũu*, *nengũ*, *ninguem* と前後の文脈を抽出し、否定辞 *nom* の有無及び位置関係が調べられた。しかし、例文を詳細に検討して、問題の否定語とされたものが、本当に否定語として用いられているかどうかは調べられていない。その観点からもう一度検討し直すと、次の(24)から(30)の例文では否定語と考えられたものが肯定の意味で用いられ、必ずしも現代語に見られるような否定語の省略とは考えられない可能性があることがわかる。問題の語を肯定の不定語に読み替えても意味は大体通じると考えられるからである。

(24) E el disse que lho guardecia muito, mas *nom queria* que *nenhũu fosse* com elle senam o scudeiro e o

irmitam. (L)

そして、そのことについてはあなたに深く感謝しますが、盾持ちと隠者以外の誰も彼に同行することは望まないのだと彼は言った

(25) *Depos esto partirom-se ambos Galaaz se foi aa foresta u a vio mais espessa, ca nom queria que *nenhũu fosse* apos elle que lhe companha fezesse,... (CCCCLXXVII ou 473?)⁶⁾*

このあと、ふたりは出発し、ガラスはより深く見えるほうの森に入った、というのも、誰かが彼のあとをつけ、彼の旅の道づれをすることを望まなかったからである

(26) *E nom é cousa posta que *nenhũu saiba* verdade da mĩa fin. (DCLXXXVI ou 679?)*

そして、誰かが私の最後について知るのには許されるべきことではない

(27) *Entom se partiu el-rei da sa companha todo armado e nom quis que o *nengũu soubesse* fora aquele que o guiava. (DCCXVI ou 705?)*

それから武具をつけた王は彼の仲間と別れた。そして彼を導く者を除いて誰も彼について知ることを望まなかった

(28) *Toda a noite andou desviando-se por u via mais espessa a foresta, ca nom queria que em *nenhũa* guisa o achassem, ca avia sabor d'andar soo e de fazer seu doo e seu chanto por sa irmãa. (CCC ou 299?)*

一晩中彼は森がより深く見えるほうへと外れながら歩き回った、というのは彼は見つけられることを決して望まなかったし、またひとりで歩き、彼の妹への痛みや悲しみを感じたかったからである

次の(29)と(30)では問題の語は動詞の後に現れているが、肯定の意味で用いられていると考えられる。これらの文は否定文とは考えられないし、*nengũu* は否定語ではない可能性がある。

(29) *Diz o conto que depois que se Persival partio de Lançarot que se fõe aa cella, nom por que cuidava que i morava *nengũu* mas por agasalhar seu cavallo cansado. (CCXXI)*

物語が語るところによれば、ペルシヴァルはランサロットと別れた後、庵に向かった。誰かがそこに住んでいると思っただけではなく、彼の疲れた馬を休ませるために

(30) *« Cala-te, ca nom quero ca estas novas sábãa *nengũu*. » (DXXXI ou 526?)*

「黙れ、誰もこの知らせを知ることを私は望まないからだ」

次の(31)の文は比較構文に近く、動詞との関係では論じられない、調査の対象としてはじめに除いた④のグループに近い構造を持つものと考えられる。

(31) *Mas aquella que tam bõa dona era que de ventuira poderia *nenhũu* achar melhor, nom quis por *nenhũa* maneira, e porende o desamou sobre todos os homens do mundo em guisa que nunca depois lhe mais esqueceo em seu coraçom. (CCXXIV)*

しかし、すばらしい女性であったあの婦人は、ひょっとすると誰も彼女に優る女性は見つけられないくらいであったが、そのことを全然望まず、従って、世界中のすべての男たちに加えて、彼を相手にしなかった、そのためその

後彼は彼女のことを決して忘れることはなかった

次の(32)～(33)の文では、否定語はむしろ動詞に対してというより副詞句の中にあり、動詞との関係が必ずしも直接的でなく、否定の「極性語」としては機能していないと考えたほうがよさそうである。

(32) E pois aviam cantado ùa gram peça e dado louvor ao creador do mundo, em tam se iam todo-los coroados contra o ceo, mas com *nenhũu* faziam tam grande festa nem lidice como com aquelle que saira postumeiro.

(CC)

そして、(天使たちが) ちょっと長い時間歌い、世界の創造主を讃えた後に、それから冠を戴いた者たちは天へ昇った。しかし、最後に出てきた者に対するほど、大きな祝いや喜びは誰に対してもしなかった

(33) E deixo[u]-se ir a Lançarot sen *nenhũa* cousa lhe dezer e dei-lhe no cavallo e matou-lho; mas el nom matou. (CCXX)

そして、ランサロットのところまで何も言わずに進み、彼の馬のところへ行き、彼の馬を殺したが、彼は殺さなかった

次の(34)では動詞に *defender* 「禁止する」が用いられている。

(34) Dessi er acharom outras letras que diziam: « ESTO DEFENDEM OS DO CASTELLO QUE *NENHÛU* DO LINHAGEM DE REI ARTUR SEJA OUSADO DE ENTRAR DENTRO ». (CXXX)

それから、再び次のように述べている別の文字を見つけた。「城の人々はこのことを禁ずる、すなわちアーサー王の血統の誰も敢えて中に入らないように」

(24) から(30)の例文に関して、*nenhũu* や *nengũu* が否定語として用いられていない可能性があることはすでに述べた。(34)での動詞の意味は「禁止する」であるから、*nenhũu* を肯定の「誰かが」というような意味にとれば、否定辞は単に使われていないだけということになる。ところが、Ali 1971, p.199には、*defender* や *escapar de* は、現代語と違い、*proibir* 「禁止する」の意味で用いられる時、その従属文は否定文の形で用いられるとある。テキストには *defender* の活用形は137回用いられているが、そのうち「禁止する」の意味で従属文を伴って用いられているものが9例ある。(34)はそのうちのひとつであるが、それ以外の8つの例ではすべて否定辞を伴い、いわば「～しないことを禁ずる」のような構造になっている。これは、Martins 1997, p.197の指摘する「虚辞的否定」*negação expletiva* と呼ばれるものであるが、このように考えれば、従属文は否定にならないといけないのだから、否定辞が本来あり、否定辞は省略されていることになる。一方、*defender* の後に肯定の従属文を伴って「～することを禁止する」という形での使用はテキストでは確認されない。このことに基づいて、*defender* の単語の意味について考えてみると、この動詞は禁止を表現するために用いられるが、この動詞自身には否定の意味はなく、むしろ「主張する、要求する」程度の意味ではないかと考えら

れる。さらに、これに関連して、「虚辞的否定」 *negação expletiva* と呼ばれているものについて考えてみると、上に挙げた (24), (25), (27), (28) のような *não querer* 「望まない」を主文の動詞として *que* に導かれる従属文に対しても、逐語的に「～しないことを望まない」といった形を取る「虚辞的否定」と呼べるようなものがあるとしてもよさそうなものである。しかし、テキストの中で39例存在する *não querer que ...* の構造を取る例のなかには、そのようなものは見当たらなかった。はたして、「虚辞的否定」と言えるような用法がどの程度用いられていたか疑問である。⁷⁾ もっとも、(34) の文については *ousado de ...* 「あえて～する」を「～する気にならないように」と取り、「アーサー王の血統の誰かがなかへ入る気にならないようにと城の者たちは警告する」と読むこともできる。この読みであれば、(34) は否定辞の省略からは無関係である。

次の(35)には写本の問題がある。動詞の前の [Nos] は編者の補足であり、もともとのテキストがそうであったという保証はないので、用例として不適切である。

(35) Assi nos aconteceu de preito desta donzella: Empero ajuda-nos! [Nos] fizemos *nenhũa* cousa que se lhe a prol torne, ca maior medo ha agora que dantes ". (CCXXVII)

このようにこのお嬢さんの件が持ち上がりました、助っ人をお願いします。彼女のためになるようなことはまだしていません、なにしろ今では前よりも彼女は怖がっているのですから

しかし、次の(36)から(38)では否定辞の省略が起きているとみなされる可能性がある。

(36) Este mesmo é o que dará fim aas aventuras do reino de Logres, este é o que vi(vi)rará por bondade em sua vida as maravilhas e as puridades do Santo Vaso, este é contra o que *nenhũa* proeza terreal poderá durar ". (CCXXII)

まさにこの者は、ログレスの王国での冒険に終止符を打つ者であろうし、この者は聖杯の不思議と清らかさを享受する者で、この者に対しては地上のいかなる壮挙も太刀打ち出来ないだろう

(37) E feze-o deitar fora do castelo en hũo lago onde *nenhũu* o podesse sacar. (DCCXIII ou 702?)

そして、彼を城の外の湖の中に、誰も彼を引き上げることが出来ないように、捨てさせた

(38) « De me outorgar por vencido », disse o cavalleiro, « *nenhũa* onra vos i avedes, ca bem sabedes que ainda me nom vencestes e que eu nom leixo esta batalha fora por amor de dom Persival ». (CCXLI)

その騎士は言った、「私が自分の負けを認めることで、あなたはいかなる名誉も得ないだろう、というのは、あたりまえのことだが、あなたはまだ私を打ち負かしていないし、私はドン・ペルシヴァルのため以外にはこの戦いをしないからだ」

(36) では動詞は未来形、(37) は接続法の形を取っているが、(38) の例文では直説法現在形である。これは否定辞の省略とはいえないだろうか？

5. 結論

現代語では普通起こらない否定語の重複が、従来考えられていたより、かなり最近まで残っていた可能性があることは Martins 1997 が指摘している。しかし、古い時代のポルトガル語の否定辞の省略について扱った研究についてはあまり聞かない。本稿の調査は、単にひとつのテキストを対象としたものであり、不十分ではある。しかし、古い時代のテキストについてあまり今まで指摘されてこなかった否定辞の省略現象について、その存在の可能性が示せたものと思う。ただし、否定の不定語は共起する動詞の法や、その作用域の問題、さらにはその語自身がはたして否定なのか、肯定なのかといった意味論的な問題をかかえている。もう少し調査を広げることと、現象を整理する必要があるであろう。

註

- 1) 古ポルトガル語とは、ポルトガル語で書かれ、年代が明記されている文献のうち現在知られている限り最古のものとされている *Notícia de Fiadores* が書かれた 1175 年頃から、16 世紀初めころまでのポルトガル語を指して用いられる名称である。本稿では単に中世語と呼ぶこともある。
- 2) Martins 1977, p.205 は 16 世紀以降のポルトガル語について、この否定語の重複についての十分な調査が行われていないとしている。
- 3) (8) から (14) の例文はすべて法令のテキストからの引用である。原文に当たってみると、必ずしも直接の従属文となっていないものもあるが、文脈から、それぞれ (8), (9), (10) は *mandamos que* 「～を命ずる」、そして (11) *per dizerẽ ca* 「～と言われるからといって」、(12) *nõ queremos que* 「～を望まない」、(13) *deffendemus que* 「～を禁ずる」、(14) *deffendemus que* に連続しているものと考えてよい。
- 4) 「聖杯の物語群」のポルトガル語訳は 3 点知られている。すべて散文で、「聖杯物語」(別名「アリマタヤの書」)、1970 年代に断片がカタロニアの国立図書館で発見された「メルリンの物語」及び本稿で資料とした「聖杯の探索」である。「聖杯物語」と「聖杯の探索」は完全な形で伝承されているといわれる。「聖杯の探索」は Phauphilet 1984 のテキストに対応するポルトガル語訳ということになるが、古仏語のテキストとつき合わせると、古仏語のほうが部分的に要約的になっていることに気付く。研究者のあいだには古仏語テキストからポルトガル語への翻訳は 1240 年代に行われたもので、その直前の 1230 年から 40 年にかけて成立していたとされる *Post-Vulgata* 作品群に最も近い伝承であると主張する人々もいる。
- 5) 問題の部分の訳は (15) が *pois que nada sabeis de sua linhagem*, (16) が *não sabeis nada de sua situação* となっている (ibid. p.200)。
- 6) 物語の後半部分ではテキストの章番号と Megale 1989 の現代語訳の章番号がくい違っているのを、

とりあえずこのような形で示した。Megale 1989 の章番号がアラビア数字。

7) 例えば次の例では「虚辞的否定」にはなっていない。ただし、この部分は写本の各章の前に書き込まれたタイトルのようなものであって、本文のテキストとは写字生も異なり同時代のものではない可能性もある。

(39) Como Galvam e Gariet *não queriam* que rei Artur soubesse do amor de Lançarot e da rainha.
(DCXXXIV ou 628 の写本の章タイトル)

ガルバンとガリエットが、アーサー王がランサロットと後の愛について知ることを望まなかったこと

[査読の段階で日本語の不自然な箇所や論理展開の仕方など貴重なご指摘を複数いただいた。本稿の内容は基本的には投稿時のものと変更がないが、表現上改めたところが多数ある。その点をお断りするとともに、改めて査読の際にいただいた貴重なコメントに感謝する次第である。]

参考文献

Ali, Manuel Said 1971 (1931¹). *Gramática Histórica da Língua Portuguesa*. Rio de Janeiro: Livraria Acadêmica.

天沢退二郎 (訳) (1994). 『聖杯の探索』459頁。東京：人文書院。

Castro, Ivo (1983). *Sobre a data da introdução na península ibérica do ciclo arturiano da post-vulgata*. Boletim de Filologia, XXVIII, pp.81-98.

Ernout, Alfred et François Thomas (1972). *Syntaxe Latine*. Paris: Éditions Klincksieck.

Ferreira, José de Azevedo (1987). *Afonso X Foro Real. Volume I Edição e Estudo Linguístico*. Lisboa: INIC.

Martins, Ana Maria (1997). *Aspectos da negação na história das línguas românicas (Da natureza de palavras como nenhum, nada, ninguém)*. Actas do XII Encontro Nacional da Associação Portuguesa de Linguística Vol.II, pp.178-210. Lisboa: Associação Portuguesa de Linguística.

Megale, Heitor (trad.) (1989). *A Demanda do Santo Graal*. São Paulo: T.A. Queiroz. (現代ポルトガル語訳)

Phauphilet, Albert(ed.) (1984). *La Queste del Saint Graal, roman du XIII siècle*. Paris: Librairie Honoré Champion.

Posner, Rebecca (1996). *The Romance Languages*. Cambridge University Press.

Väänänen, Veiko (1981). *Introduction au latin vulgaire*. Paris: Éditions Klincksieck.

Expressões negativas no português arcaico

Naotoshi KUROSAWA

No português contemporâneo, quando indefinidos negativos como *nenhum*, *ninguém*, *nada* aparecem em posição pré-verbal, o marcador de negação para o verbo (*não*) é obrigatoriamente dispensado, embora a repetição do indefinido negativo e do marcador de negação seja sempre requerida no caso em que tais indefinidos aparecem em posição pós-verbal. Na língua arcaica o indefinido negativo e o marcador de negação normalmente repetiam-se independentemente da posição do indefinido quanto ao verbo. José de Azevedo Ferreira, no seu estudo da edição de Afonso X Foro Real (1987), cita uns casos de omissão do marcador de negação quando o indefinido negativo antecede ao verbo. No entanto os estudos que tratam desta omissão na língua medieval são até agora escassos. Na presente publicação apresentamos uma investigação sobre a repetição da negação e a omissão do marcador de negação no texto medieval da *Demanda do Santo Graal* e assinalamos alguns exemplos em que a omissão do marcador de negação depois do indefinido negativo ocorre como na língua portuguesa contemporânea.